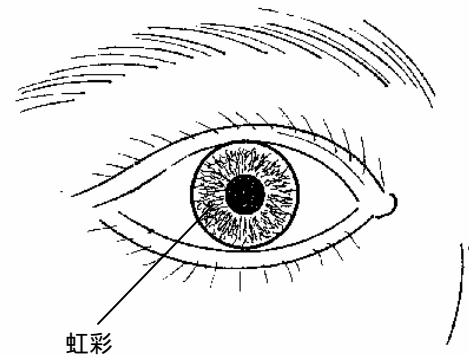




外国人の目はどうして青いの

メラニンが少ないため

外国人、特に西洋人の目が青いのは、眼球（目玉）にある虹彩に、メラニンという色素（色のつぶ）が少ないためです。



黒目の真ん中に、真っ黒く見える丸いところがあり、このまわりに、細かいしわのよった膜がありますが、これが虹彩という膜で、目が青いか黒いかいっているのは、おも

にこの虹彩の色のことをいっているのです。この虹彩には、メラニンという色素がありますが、虹彩にこのメラニンが多いと黒くなり、少ないと茶色や青い色に見えるのです。

また、メラニンは虹彩のまわりの膜や、眼球のおくにある網膜というところにもふくまれています。西洋人には、虹彩やそのまわりの膜にあるメラニン色素が少ないので、網膜の色素がすけて見えるために、虹彩の色が、茶色や青い色などに見えるのです。

虹彩のはたらき

虹彩やそのまわりにある膜の色素は、ひとみのあな以外の部分から入る、不必要な光をさえぎるはたらきをしています。不必要な光や、有害な光が目にとたくさん入ると、見たものの像が、はっきりと網膜に結ばず、よく見えないからです。

日本人の眼は黒く、ここにたくさんの色素があるため、西洋人よりも視力が強く、強い光にもたえられます。しかし目が青く、虹彩にメラニン色素の少ない西洋人は、視力も弱く、強い光を非常にまぶしく感じるため、サングラスが必要なのです。（監修・保志 宏）

